



おかあさんのてのひら

つばいさかえ  
壺井 栄

わたしのおかあさんはいなかの百姓ひやくしやう女によでした。お天気てんきさえよければくわをもって畑はたけをたがやしているか、かまをもって山へたきぎつくりに行くか、とにかくはたらくことのすきなおかあさんの手でした。

おかあさんはときどきじぶんの手をながめて感心かんしんしていました。ふしの高いたか、ゆびの太いふと、皮膚ひふのかたいおかあさんの手です。でも、そのおかあさんの手がとてもやさしくて、器用きようで、えこひいきがなかったことを、わたしは知しっています。

わたしが病氣びやうきをしたとき、おかあさんの手がせなかや手や足やをさすってくれると、わたしの病氣はだんだんよくなっていきました。そ

の手のやさしかったこと。それからおかあさんは、わたしにお手玉てだまや、手まりをつくってくれたこともあります。お手玉の中にはアズキを入れ、手まりは色糸いろいとでかがってくれました。その器用きようでしんせつだったこと。

いつかこんなことがありましたよ。ある日曜日にちようびにわたしは弟おとうとといっしょに山へたきぎ注1をしよい出しだにいきました。もちろんおかあさんともいっしょです。わたしの生まれた村は、瀬戸内海せとないかいの小豆島しょうどしまの中の小さな村なのです。小豆島は島のまん中に神懸山かみかけやまとそれにつながる山々がどつかりとすわりこんでいますので、そのふもとにくらしてい

る人々は、山坂さかをのぼってたきぎをとりにかねばなりません。たい  
らな道みちを車くるまをひいて通とおるのとちがって、このたきぎ出しは、苦くろ勞ろうな  
仕し事ごとの一つでした。それは大むかしから、きょうまでつづいているの  
です。山は家から四キロもはなれた遠とくでしたので、道どう中ちゆうで、一どぐ  
らいおやつが出ます。おやつは布ぬののふくろにはいついておかあさん  
のしよ注<sup>2</sup>いこにくくりつけてありました。

「おかあさん、あれ。」

わたしたちがそのふくろをゆびさしてねだりますと、三どめぐらい  
におかあさんはふくろの口をあけてくれます。カキだったり、クリだ

ったり、やいたおさ<sup>注3</sup>つだったり、おかあさんは、それをおなじようにわけてくれました。それなのにわたしたちはじぶんのわけまえがもしやすくはないかと目を光<sup>ひか</sup>らせて、おたがいにくらべあわせました。そしてときにはじゃんけんでわけたりしました。その日のおやつは、ソラマメのいったのでした。おかあさんがふくろの中から一<sup>ひと</sup>にぎりずつとり出<sup>だ</sup>してくれたのを、わたしと弟<sup>おとうと</sup>は、おおいだのすくないだのといつて、もんくをつけました。

「数<sup>かず</sup>をよんでみな。すくないほうにそれだけたすから。」

おかあさんにそういわれてわたしと弟<sup>おとうと</sup>は、ひい、ふう、みい、と数<sup>かぞ</sup>

えました。両方りょうほうとも二十八つぶです。わたしも弟もすっかりかんしん感心して、  
なにもいうことができませんでした。なんとというえこひいきのないお  
かあさんのてのひらだったことでしょう。

「まるで、注4ますではかったようだね。」

「うん、おかあさんの手はますなんだよ。」

わたしはいまでもときどきおも思い出だしては、じぶんの手をながめてみ  
ます。

注1 たきぎをせおってはこぶこと

注2 にもつをくくりつけてせおってはこぶ、わくでできた道具どうぐ

(8ページのさしえの人物じんぶつがせおっている道具どうぐです)

注3 さつまいものこと

注4 お酒さけや豆まめなどをはかるいれもの

『日本児童文学名作選 6 柿の木のある家』

株式会社あかね書房より

※作品の中に現在では使われていない表現があります。文学作品であるということをかみがみ、原文のままにしています。

